

2004年12月27日

人間科学研究科委員長 殿

境 泉洋氏 博士学位申請論文審査報告書

境 泉洋氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査を行ってきましたが、2004年12月11日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1. 申請者氏名：境 泉 洋

2. 論文題名：ひきこもり状態の改善に関わる家族の認知行動的要因と
家族への集団認知行動療法の効果

3. 本論文の構成と内容

本研究の目的は、ひきこもり状態の実態とその改善に関わる要因を明らかにするとともに、ひきこもり状態にある人の家族を対象とした集団認知行動療法プログラムを作成し、その効果を実証することである。

第1章では、ひきこもり状態の定義を行ったうえで、ひきこもり状態に関するこれまでの研究について展望が行われ、これまでの研究では、ひきこもり状態について正確な実態が把握されていない、ひきこもり状態にある人の家族に関する調査が行われていない、

具体的な対処方法を身につけるための支援が行われていない、ひきこもり状態を測定する尺度の作成が行われていない、家族への支援がほとんど行われていない、支援の効果について統制群を用いた検討が行われていない、という問題点のあることが指摘された。そして、こうした問題点の解明に向けて第2章で本研究の目的が提示された。

第3章では、ひきこもり状態にある人、およびその家族の実態を明らかにするために、ひきこもり状態に悩む家族によって組織される自助グループにおいて調査が実施された。その結果、ひきこもり状態にある男性の数は女性より多い、ひきこもり状態にある人の多くは一人で外出している、ひきこもり状態にある人の多くは社会恐怖、強迫性障害、うつ病性障害、統合失調症と診断されている、女性の方が男性よりも相談機関に多く来所している、相談機関に来所したことのある人はそうでない人よりも一ヶ月の外出日数が多いこと等の点が明らかにされた。また、ひきこもり状態にある人を持つ家族に関しては、ひきこもり状態にある人の親は、ひきこもり状態にない人の親よりもストレス反応が有意に高い、ひきこもり状態にある人の親は、特に「抑うつ・不安」に関連するスト

レス反応が高いことが明らかにされた。

第4章では、認知行動理論の観点から、ひきこもり状態の改善に関わる要因を測定することのできる尺度が作成された。その結果、ひきこもり状態にある人が示す問題行動を測定する尺度、ひきこもり状態にある人に対する家族の偏った意識を測定する尺度、ひきこもり状態にある人が示す問題行動への対応に関する家族のエフィカシーを測定する尺度、ひきこもり状態にある人と接するとき家族が行っている社会的スキルを測定する尺度が作成され、その信頼性と妥当性が検討された。

第5章では、ひきこもり状態にある人が示す問題行動の改善に関わる要因と家族のストレス反応の改善に関わる要因について検討が行われた。ひきこもり状態にある人が示す問題行動の改善について、家族の主張スキルは、ひきこもり状態にある人が示す攻撃行動、家族回避行動、不規則な生活パターンを低減させる、ひきこもり状態にある人に対する家族の偏った意識は、ひきこもり状態にある人が示す日常生活活動の欠如や活動性の低下を促進するが、抑うつを低減させる、ひきこもり状態にある人が示す問題行動への対応に関する家族のエフィカシーは、ひきこもり状態にある人が示す対人不安、抑うつを低減させるが、家族回避行動を促進させる等の点が明らかにされた。また、家族のストレス反応の改善に関わる要因について、ひきこもり状態にある人が示す攻撃行動、強迫行動、不可解な不適応行動は家族のストレス反応を促進する、ひきこもり状態にある人に対する家族の偏った意識は家族のストレス反応を促進する、ひきこもり状態にある人が示す問題行動への対応に関する家族のエフィカシーは、家族のストレス反応を低減させること等の点が明らかにされた。

第6章では、家族を対象とした集団認知行動療法プログラムを作成し、その効果を検討した。対応に関する知識教授やグループ討論に焦点を当てた集団認知行動療法プログラムの効果の介入効果はほとんど認められなかった一方、機能分析による問題把握と社会的スキル訓練に焦点を当てた集団認知行動療法プログラムの効果については、家族の認知的要因を改善させる、冷静に対応するといった家族の社会的スキルを改善させる、家族のストレス反応を低減させる、ひきこもり状態にある人が示す活動性の低下を改善させることが明らかにされた。

第7章では、本研究の結果に関する総合考察が行われた。ひきこもり状態の精神医学的位置づけについては、ひきこもり状態が精神疾患の症状に位置づけられる可能性のあることが指摘された。また、家族を対象とした支援においては、機能分析や行動理論の観点から、家族の健康維持とひきこもり状態にある人の相談機関への来所行動の形成を目標とすることの必要性が指摘された。また、ひきこもり状態にある人の相談機関への来所行動を形成するためにはどのような方策が必要かといった今後の課題が提言された。

4．本論文の評価

本研究の結果、新たに得られた知見は以下の通りである。すなわち、

ひきこもり状態にある男性の数は女性より多い、ひきこもり状態にある人の多くは一人で外出している、ひきこもり状態にある人の多くは社会恐怖、強迫性障害、うつ病性障害、統合失調症と診断されている等、引きこもりの実態が明らかにされた、

ひきこもり状態にある人の親は、ひきこもり状態にない人の親よりもストレス反応が有意に高い、ひきこもり状態にある人の親は、特に「抑うつ・不安」に関連するストレス反応が高い等、引きこもり状態にある人を持つ家族の実態が明らかにされた、

認知行動理論の観点から、ひきこもり状態の改善に関わる要因を測定することのできる尺度が新たに開発され、その妥当性と信頼性が検討された、

家族の主張スキルや家族の引きこもりに対する意識が、ひきこもり状態にある人が示す攻撃行動、家族回避行動、不規則な生活パターン、あるいは、活動性の変化、気分に影響していること、

ひきこもり状態にある人が示す攻撃行動、強迫行動、不可解な不適応行動等と家族のストレス反応の関係が明らかにされた、

家族を対象とした集団認知行動療法プログラムが開発され、それは、家族の認知的要因の改善と家族の社会的スキルの改善に貢献するだけでなく、家族のストレス反応を低減させ、ひきこもり状態にある人の活動性を改善させることを実証した、等の諸点である。

以上の研究の成果に基づいて臨床心理学的観点から引きこもりの実態とその治療、予防に関する多くの示唆を得たことは大きく評価することができる。また、本研究において作成された諸尺度は、引きこもり状態の診断と予防に大きく貢献するものである。

そうした点から本研究は、これまでのわが国における臨床心理学研究に見られない独創性と新しい知見をもたらすものであり、今や大きな社会的問題となっている引きこもりの治療と予防に関して新たな示唆を与えるものである。

上記のような評価を得て、本審査委員会は、境泉洋氏の学位申請論文「ひきこもり状態の改善に関わる家族の認知行動的要因と家族への集団認知行動療法の効果」が博士（人間科学）に値する研究であるとの結論に至った。

5. 境 泉洋氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学	教授	博士(医学)(東京大学)	野村	忍	印
審査員	早稲田大学	教授	博士(人間科学)(早稲田大学)	根建	金男	印
審査員	北海道医療大学	教授	教育学博士(筑波大学)	坂野	雄二	印